

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 20 日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370655

研究課題名(和文)英会話力養成のための“思考型キューカード学習法”による教授法の開発

研究課題名(英文)The Development of Pedagogy for Cue-cards English Conversation Practice Based on Thinking Ability

研究代表者

大月 敦子(Otsuki, Atsuko)

相模女子大学・学芸学部・講師

研究者番号：90618373

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究が提案する“思考型キューカード学習法”は、言語学研究によって明らかになった動詞本来の文生成のための生産性・柔軟性に着目し、それを英会話学習に応用したものである。この研究の狙いは、従来の暗記中心の英会話学習の代替法として、動詞をヒントに英文を考えながら話す力の育成を目的としている。動詞をキーワードとして用いる本教授法の妥当性の検証、実験、実践的研究を行うことによって、言語理論と実践研究によって裏打ちされた教授法の研究開発を行った。その結果、本教授法の自律学習効果が予想以上に高く、学習者負担も軽減されることが認められ、従来の暗記学習の学習法の代替法としての実現可能性が確認できた。

研究成果の概要(英文)：“English Conversation Practice Based on Thinking Ability” which is originally designed for English speaking practice is characterized by using the power of verbs. We assume that verbs can work as a trigger to build up a sentence and play a critical role in language study. The purpose of our study is to seek and develop an alternative learning methods to rote learning. The method designed in this study is aiming to lead a learner to concentrate on building a sentence, emphasizing not to memorize words, phrases and sentences by rote. We assume that this approach is based on autonomous thinking ability of human beings as one of linguistic ability of human beings. In this study, we conducted some practical experiments to verify the adequacy of our pedagogy and developed a teaching method. As the result, we can find that our method leads high learning efficiency and the student's workload is reduced.

研究分野：言語学、英語教育、英語学、

キーワード：思考型キューカード学習法 暗記学習代替法 動詞キーワード 自律学習 言語能力

1. 研究開始当初の背景

ビジネス界を中心に、英会話力に対する社会の要請は年々高まっていた。しかし6年間(大学4年間を含めれば10年間)の英語学習にもかかわらず、英語が話せず自信を失う日本人は多く、日本人が英語を話せないことがまるで社会通念であるかようになっていた。

学校現場では、英語が話せるようになりたいと夢を抱いて勉強し始めた子供たちが、学習が進むに従って徐々に英語嫌いとなり、英語学習そのものが困難になっていた。そんな子供達だが、英語で話せるようになりたいという夢は失っておらず、「英会話」を手掛かりに策を講じれば、状況改善の可能性はあると考えた。

日本人の英語苦手意識、英語嫌いの理由は何か。主な理由として、過度な暗記学習への依存と、それに対する抵抗感があるのではないかと本研究は考えた。それならば暗記学習に過度に依存しないための代替学習法を開発すれば、英語嫌いへの対策、英会話への夢の実現、そして社会の英会話力への要請にも応えることができるのではないかと考えた。

そこで本研究は言語学の見地から「動詞」の優位性に着目した。これまでの言語学研究の中で、「動詞」が統語(文の語順)や意味の生成に重要な役割を持ち、またその生成の際の生産性や柔軟性に優れていることが明らかになってきたからである。

「動詞」の優れた特性を活かすということは、人間が本来持っている言語操作能力を利用することであり、当然、学習者に与える学習負担は少ないはずである。そこで学習負担が大きい暗記学習法の代替学習法となる可能性に着目し研究を始めた。

2. 研究の目的

(1) 本研究が提案する動詞の生産性・柔軟性を応用した「英会話力養成のための“思考型キューカード学習法”」が、暗記に頼らない思考型英会話練習法として有効であるか否かを実験的手法によって明らかにする。

(2) 「思考型」の由縁は、学習者が動詞を手掛かりに頭の中で英文を組み立て自律的に英語で話し、更に応用性、汎用性のある英会話力の養成を目指すところにあり、学習法・練習法としての実用可能性を授業実践によって示す。

(3) 暗記学習の代替としての本学習法の教授法、教材開発に道筋をつける。

(4) 日本人の英会話力の向上を実現し、それによって英会話力を切望する社会の要請に応え、更に英語教育・言語学研究的の深化に貢献する。

3. 研究方法

3.1. 実験

【実験の目的】

学習者が実際に英語を第二言語として習

得し運用する時、動詞が語彙機能として持つ文生成力(プロダクション力)を、はたして実際に働かせているのか、そのプロダクション力は動詞・形容詞・名詞の品詞間において違いはあるのか、そして本研究の最終目標である、動詞のプロダクション力を応用した「思考型英会話」を可能にする練習法の開発可能性を探る。

【調査対象】

関東地域の私立大学1・2年生97名(調査有効人数73名)。多くの学生の英語力は英検3級程度で、ごく少数の学生が準2級を取得しているが、総じて英語を苦手としている。

【調査方法】

2013年7月実施。最初に英語が苦手な理由について問う質問紙調査を行い、ついで“Which country do you want to visit?”の質問に対して、英語で1分間自由に話す。

【質問紙】

英語が苦手な理由を問う項目:「苦手な理由は何ですか」に5つの選択肢(1.単熟語を覚えること2.文の仕組みの理解3.発音が難しい4.読み取り5.その他)から複数回答で選ぶ。

【1分間スピーチの流れ】

スピーチは個別に行われ、“Which country do you want to visit?”の質問に対して、1分間、英語で自由に話してもらい、その音声を録音した。

スピーチをする際に動詞・形容詞・名詞それぞれを5語提示したが、必ず使用する必要はなく、参考とするようにした。

動詞・形容詞・名詞の品詞の日常よく使用される基本語を合計15語提示した。

動詞: like, see, play, eat, study

形容詞: happy, fun, beautiful, exciting, cool

名詞: people, building, hiking, cars, music

動詞・形容詞・名詞の各5語は、事前に自由にスピーチを行ってもらい、その中から使用頻度の高かった語をそれぞれ選んでいた。

【結果と考察】

質問紙調査では、英語が苦手な理由について「2.文の仕組みの理解」が最も多かった。

表1. 「英語が苦手な理由」

	単熟語を覚える	文の仕組み	発音が難しい	読み取り	その他
人数	24	51	27	21	6

1分間スピーチでは、多少の個別的ばらつきはあるものの、品詞別の平均使用回数は動詞が15.6回と最も多く使用され、次に形容詞が10.6回、名詞は僅かに1.6回だけだった。

表2. 「動詞の使用回数」

like	see	play	eat	study	平均
9	14	17	12	16	15.6

表3. 「形容詞の使用回数」

happy	fun	beautiful	exciting	cool	平均
27	0	12	11	3	10.6

表4. 「名詞の使用回数」

people	building	hiking	car	music	平均
2	2	2	0	2	1.6

名詞 5 語の中には、hiking のようなイベント性を持つ名詞、music のような抽象名詞、building, car のような普通名詞、people のような集合名詞が含まれ、名詞の種類に片寄がないように提示した。名詞の種類に関わらずそれぞれの使用回数に偏りはなく、5 つの名詞全てにおいて使用回数が少なかった。これによって、名詞は話者の文脈によって恣意的に選択され、提示された 5 つの名詞に束縛されることなく話者によって自由に選ばれらることを考える。このことは以下で議論される文のプロダクション力を左右する統語的結束性の度合いを判断する材料になる。

動詞が文を生成するプロダクション力を持つか否かについては、1 分間英文スピーチの中で学生は、ただ思い浮かぶ単語を羅列していたわけではなく、頭の中で文の構造を意識しながら英文を組み立てる作業をしていることが分かった。

表 5 は、同一の動詞・形容詞・名詞の基本 15 語の提示によって被験者が発話した、文として成立している「完成文」、文として完成していない「未完成文」の数を、品詞別に示す。また表 6 は、キューワード 15 語の提示語が使われた（提示語）時と、使われなかった（非提示語）時の、それぞれの完成文と未完成文の数を示すと共に、提示語・非提示語における完成文と未完成文の割合（%）を示す。

表 5. 「品詞別にみる完成文と未完成文の数（提示語を使用して）」 単位：文の数

動 詞		形 容 詞		名 詞		合 計	
完 成 文	未 完 成 文	完 成 文	未 完 成 文	完 成 文	未 完 成 文	完 成 文	未 完 成 文
54	0	6	9	2	3	62	12

表 6. 「提示語と非提示語間にみる、完成文と未完成文の数と割合」 単位：文の数と割合（%）

提示語		非提示語	
完成文	未完成文	完成文	未完成文
62	12	31	15
84%	16%	68%	32%

表 5 と表 6 より、提示語がある場合、完成文の数は動詞を選んだものが最も多く、形容詞、名詞の順で完成文の数は少ないことがわかる。一方、未完成文についてみると、動詞を用いたもので未完成文を作成した例はほとんどなく、形容詞・名詞は未完成文の数は完成文の数を上回る。文は最低、主語と動詞から成り、動詞が文の成立に大きく寄与す

ることを示す値が大きいのは、文の構造からいって自明とも言える。しかし目的語・補語が必要な場合も、それらを省略することはほとんどなかった。このことから動詞を中心とした主語・目的語・補語の結束性は、英語の第二言語習得の言語運用時においても高いと考える。

さらに表 6 から、キューワード 15 語を提示した場合と、非提示語において、完成文と未完成文の数の違いから、提示語を利用した時の方が完成文を生成する数と割合が共に高いことがわかる。このことから、提示語をキューワードとして利用する妥当性が示された。

質問紙調査において英語がうまく話せない理由として、「文が組み立てられない」を選んだ学生が 3 割以上にのぼり最も多く、それを裏付けるように、英文スピーチの中で文章を組み立てて話すことができた学生の数と、文として成立している文の数は少なかった。しかし、文の数としては少ないが、その中で使用された提示語は、動詞が最も使用頻度が高かった。さらに、1 分間スピーチにおいて、提示語と非提示語による完成文と未完成文の数と、両者の比率に差異が観察されたことから、語を提示することの優位性が確認された。これらのことから、提示した動詞・形容詞・名詞の三品詞の中で動詞が最も文生成のためのプロダクション力が強く、統語・意味における理論的優位性が、第二言語習得段階の言語運用の際に反映されていることが明らかになった。これらのことより、本研究では動詞をキューワードとして利用し、効果が得られる可能性を示し、それによってさらなる研究への道筋を示すことができた。

【今後の展望】

提示した語の品詞別の比較は行っているが何も提示しない場合との比較は行っていない。語を提示することにより、実際に発話が促されるのか否かを調査する。

実験による分析の結果、統語・意味の観点だけでなく、第二言語習得の運用の観点からも、動詞のプロダクション力が他の形容詞・名詞よりも勝っていることを確認することができた。よって今後は、動詞のプロダクション力をキューとして用いた場合、「思考型英会話」の練習法として効果があるか否かを授業実践で確認する。

3.2. 授業実践

【目的】

「動詞」の優位性が実験によって確認されたことから、実際の授業における動詞キューワードを用いた英会話練習法・学習法の実践可能性を確認する。

【学習の流れ】

図 1. 「思考型英会話練習の流れ」に沿って授業実践を行った。

図1. 「思考型英会話練習法の流れ」

英文原稿作成 キューワード抽出
 キューカード作成 キューワードスピーチ

半期15回(1回90分)の授業の中で、図1の流れに沿って、計3回の授業実践を行った。3回のそれぞれに異なったテーマを与え、そのテーマ毎にヒントとなる情報を与えブレインストーミング(brain storming)をしながら各自がスピーチ原稿を作成する。この時、会話の論理性を意識させるために、スピーチが“Introduction(導入)” “Body(本論)” “Conclusion(まとめ)”の構成になるように指導する。

英文原稿作成時には、書く内容についてテーマを与え(文字制限をしない)、それに沿って各自作成する。キューワード抽出では作成した英文原稿からキューとなる語を選び出す。但し、どの語句を選ぶかの選択は、動詞を中心に選び出すよう指導する。キューカード作成では英文原稿から抽出した動詞「キューワード」を、「キューカード」(図2)のそれぞれの下線の空欄部に書き入れる。

カード(図2)は“Self-Introduction & Home Town”をテーマに話す際の例である。図2のIntroduction(導入)部にはSalutation(挨拶)、Family(家族)、Personality(性格)、Home Town(故郷)について、Body(本論)にはHome TownのGeneral Information(情報)、Uniqueness(特徴)について、Conclusion(まとめ)には、スピーチ全体のSummary(要約)の構成とし、トピックに沿ってキューワードを記入する。

図2「キューカード」(大月2013)

INTRODUCTION.

Salutation: _____
 Family: _____
 Personality: _____
 Home Town: _____

BODY

Home town: _____
 (General Information): _____

 (Uniqueness): _____

CONCLUSION

Summary : _____

 Gratitude: _____

キューワードスピーチでは、学習者は事前に英文原稿を音読練習しスピーチに備えた。スピーチは、一人約2分間とし、英文原稿は見ずに、キューカード上に書かれているキューワードだけを頼りに聴衆の前で行う。

【授業実践の考察と結果】

「思考型英会話学習法」を使ったスピーチ練習は、三つのクラス(1年生初級、2年生

初級、2年生初級)で行った。表7は、各クラスが三回行ったキューカードスピーチの三回目の時に参加学生が発話した総語数と文の数のクラス平均を示す。1年/初級の一回目のテーマは、“Self Introduction”、二回目は“My Hometown”、三回目は“My Prized Possessions”について一人ずつスピーチした。2年/初級と2年/中級の一回目のテーマは“My Home Town”、二回目は“My Dream Job”、三回目は“Historical Person”についてキューカードスピーチを個別に行った。その結果、回を重ねる毎に発話語数が増え、また表7が示すように、テーマやレベルが異なっても、平均発話語数とその平均偏差、文の平均数とその平均偏差に差異は認められなかったことは興味深い。

表7. 「1回(2分間)のスピーチあたりの発話語数と文の数」

テ-マ	発話語数 (平均偏差)	発話文数 (平均偏差)	1文中の 語数	学年/ レベル
Prized Possessions	111(17.2)	14.3(1.6)	7.8	1年/初級
Historical Person	111(19.8)	14.1(2.6)	7.9	2年/初級
Historical Person	109(21.4)	14.4(2.7)	7.7	2年/中級

授業実践についての質問に対して61名の学生がアンケート(表8~11)に回答した。

表8. 「学生アンケート“スピーチの前に準備をしましたか?”」

全くして いない	少しした	ある程度 した	十分した
1%	26%	50%	23%

カードを使ったスピーチに際して、事前に準備をしたかどうかの質問「スピーチのまえに準備をしましたか?」(表8)に対して、99%の学生が準備をしていた。このことから、英語で話すことに対して学生が期待を持って、意欲的に臨んでいることが分かる。

表9. 「学生アンケート“スピーチの前にどんな準備をしましたか?”」

2-3回音 読	少し音 読	10回位 音読	全て暗 記	黙読
17%	32%	41%	7%	3%

表9は「スピーチの前にどんな準備をしましたか?」についての回答である。事前に、スピーチ用に作成した原稿を暗記しないように伝え、音読を勧めていたことから、回答者の90%は暗記をせずに音読練習を行い、スピーチに備えた。

表10. 「学生アンケート“スピーチの出来に満足していますか?”」

満足し てない	少し満 足	ある程 度満足	とても 満足	分から ない
12%	47%	29%	7%	5%

スピーチの出来に対して表10は、「少し満足」「ある程度満足」「とても満足」を合わせて、83%の学生が満足であると回答した。

表 11. 「学生アンケート “ どんなどころに満足していますか？ ”

考えながらスピーチできた	思い出しながらスピーチできた	暗記感がなかった	自分の言葉で話している	自信を持って話せた
21%	46%	25%	7%	1%

本学習法の「どんなどころに満足していますか？」の質問に対して、21%が「考えながらスピーチできた」、46%が「思い出しながらスピーチできた」と回答し、「思考」に特色を持つ本学習法の効果を実感し満足していた。また 25%が「暗記感がなかった」と回答し、7%が「自分の言葉で話している」と回答し、概ね「思考」を暗示する好意的な反応を示した。また表 5 において 12%が自分のスピーチの出来栄には「満足していない」と回答していた学生も、本学習法に対しては概ね「思考型」であることを実感し、「思考型英会話学習法」に対して満足していることを示している。

【今後の展望】

授業実践で用いた教材を精査し、本学習法の実用化を目指す。

4. 研究成果

先行研究によって明らかになった日本人大学生の英語学習意欲の低下、英会話力を望むビジネス界の要請に対して本研究は、言語学理論を応用した動詞をキーワードとして用いる「思考型英会話学習法」を提案し、その効果を明らかにするために実験と授業実践研究を行った。その結果、以下の成果を得ることができた。

(1) 動詞キーワードの優位性を確認

本実験によって、内容語としての動詞・名詞・形容詞の中で、動詞が最もキーワードとして英会話の際に話し手が文を作り出す生産性・柔軟性が高いことが分かった。これによって、動詞がキーワードとして用いることの優位性が明らかとなり、「思考型英会話学習法」による学習効果の可能性を認めることができた。

(2) 「思考型英会話学習法」のモデル化

動詞の柔軟性 (Flexibility) と生産性 (Productivity) が英会話時に文の生成を統語と意味の両面から手助けすることを、モデル化することができた。

図 3 「思考型英会話学習モデル」



(3) 言語操作時の「思考」を確認

動詞の優位性を、英会話学習の際の「キーワード」として利用する授業実践を行った結果、学習者の 99%が「考えながらスピーチが

できた」「思い出しながらスピーチができた」「暗記感がなかった」「自分の言葉で話している感じがした」と回答した。このことから、本学習法によって学習者が暗記に頼らず考えながら英文を組み立てながら話をしている、つまり「思考」していることを確認することができた。

(4) 暗記学習代替学習法の可能性を示す

学習者のモチベーション、学習の応用性・汎用性等の観点から、英会話練習の際に暗記学習に過度に依存することの弊害は大きい。そこで、本「思考型英会話学習法」は、動詞キーワードを利用することによって、人間本来の言語操作能力を導き出し、無理なく「考えながら」文を組み立てという手法を開発することができた。

(5) 英語苦手意識の改善を確認

これによって、暗記学習の代替学習法が実現となり、過度の暗記学習による英語嫌いの学習者が、英語で話すことの楽しさを味わい、自信を持ち、苦手意識がなくなることが確認できた。

(6) 日本の国際化への貢献

本学習法の広報によって、日本人の英会話力が改善される可能性が得られ、英語苦手意識を持つ学習者、英会話力を切望するビジネス界、そして日本の国際化への貢献可能性を示すことができた。

(7) 小学校英語教育への応用可能性

英語学習が様々に議論されている中、未発達で成長途上期にある小学生児童に対して新たな教授法の開発と作成は緊急である。従来暗記型学習では児童への負担は大きいことは予想に難くない。本学習法は、人間本来の言語操作能力を利用しているからこそ、児童に無理なく英会話練習が提供でき、その応用可能性を得ることができた。

(8) 広報活動による多くの理解と期待

三年間の研究の中で、国内 (4 件) と海外 (4 件) で計 8 回の学会発表を行った。いずれの学会においても、本学習法に対して多くの聴衆から賛同と評価を受けた。特にネイティブスピーカーを中心に実際に英会話を指導する立場の聴衆からの反応は大きく、さらなる研究を望む意見を多数得た。このことから、広報活動によって本研究に対して国内外から理解を得、それと共に多くの期待が寄せられていることが分かった。

(9) 言語学研究への貢献

本研究は、これまでの言語学研究を基に立案されたものであるが、BE 動詞の扱いについて検討される必要があることが分かった。特に本研究の実験の中で、日本人学習者が BE 動詞を多用すること、しかも過剰に使用することが分かった。BE 動詞は、もっとも状態性が強い動詞であると言われているが、日本語に相当する語はない。にもかかわらず脱落するのではなく、多用、若しくは過剰に使用されていた。「統語」「意味」の両面からの言語学的かつ対照的な議論・解明が必要であること

が分かった。

結論

本研究によって多くの成果が得られたが、解決すべき、または明らかにすべき課題も多く得られた。本研究の根幹にかかわる「思考」について、その定義、定義の根拠を明らかにする 英語学習のインプットとアウトプットにおいて、本学習法がどのように貢献できるのか 本学習法によって、日本人学習者の英文モジュール形成にどのような効果が得られるのかについて課題が得られた。

また、本学習法を実際の授業に利用する際の課題も得られた。授業実践の中で“キューワードスピーチ”を行う前に事前準備として音読練習を学生に勧め、多くの学生が事前に音読を数回、多い学生で 20 回音読をしていた。音読による記憶と暗記学習の違い 授業実践で行った一方向のスピーチ練習を、双方向の会話の練習とみなすことができるのか 動詞と動詞以外の品詞をキューワードにしてスピーチを行った場合の違いを明らかにする 広報、情報提供、教材提供のための専用ホームページの作成が今後の課題である。

参考文献

- Ellis, Rod. (1997). *Second Language Acquisition*. Oxford University Press. UK: Oxford.
- カレイラ松崎順子/大月敦子(2014). 思考型英会話を可能にする動詞の生産性～言語学から第二言語習得への応用～. 人文自然科学論集、東京経済大学人文自然科学研究 No.135.3-14.
- 大月敦子(2015). 「思考型英会話学習法」の応用言語学からの試み～アンケートによる学習評価を中心に～. 専修大学外国語教育論集 43 号.19-38. 専修大学
- Otsuki, Atsuko/ Carreira, Matsuzaki Junko. (2014) *English Conversation Practice Based on Thinking Ability*. 2014 Conference Proceeding, Hawaii International Conference on Education. 612-621.
- 大月敦子(2013)「思考型英会話学習法の試み-言語学研究から英語教育への応用-」. 『相模女子大学紀要(人文系)』(相模女子大学)第 76A 号.57-62 .
- 大月敦子.(2010). 「メトニミーの言語処理プロセスについての分析」. 『信州大学人文社会科学研究』(信州大学)4 . 72-84.
- 大月敦子(2002). 「メトニミー: 動的な語の意味を如何に形式化するか～ “シドニーは大成功だった” .KLS 22. Kansai Linguistic Society.
- Pustejovsky, J(1996). *The Generative Lexicon*. Computational Linguistics vol.17:409-441.

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計 3 件(内国際誌 1 件))

2015. 大月敦子. 「思考型英会話学習法」の応用言語学からの試み～アンケートによる学習評価を中心に～. 専修大学外国語教育論集 43 号.19-38. 専修大学

2014. カレイラ松崎順子/大月敦子. 思考型

英会話を可能にする動詞の生産性～言語学から第二言語習得への応用～. 人文自然科学論集、東京経済大学人文自然科学研究 No.135.3-14.

2014. Otsuki, Atsuko/ Carreira, Matsuzaki Junko. *English Conversation Practice Based on Thinking Ability*. 2014 Conference Proceeding, Hawaii International Conference on Education. 612-621.

【学会発表】(計 8 件(内国際学会 4 件))

2016. 大月敦子. “思考型キューワード英会話学習法” 映画英語コーパスを用いた理論的背景と学習法としての妥当性. 映画英語教育学会北海道支部第 5 回大会. 2016 年小樽商 1 月 10 日. 小樽商科大学札幌サテライト.

2015. 大月敦子. 「思考型英会話学習法」の提案. 映画英語教育学会第 21 回大会. 2015 年 8 月 7 日. 京都女子大学.

2015. Otsuki, Atsuko. “English Conversation Practice Based on Thinking Ability”. Center for Applied English Studies (Hong Kong). Jun.11-13, 2015. The University of Hong Kong.

2015. Otsuki, Atsuko/ Carreira, Matsuzaki Junko. The Adequacy and the Learning Effects of “English Conversation Practice Based on Thinking Ability” as an Approach from Applied Linguistics. The Society for Teaching English through Media (South Korea). May 16, 2015. Korea Nazarene University.

2014. 大月敦子. 「思考型英会話学習法」～新しい英会話学習法の提案～. 映画英語教育学会東日本支部第 5 回大会. 2014 年 11 月 30 日. 麗澤大学東京研究センター.

2014. 大月敦子. カレイラ松崎順子. “動詞キューワード” 効果の可能性を考える～「思考型英会話練習法」の開発に向けて～. 外国語教育メディア学会関東支部第 133 回研究大会. 2014 年 11 月 15 日. 高崎健康福祉大学.

2014. Otsuki Atsuko. *English Conversation Practice Based on Thinking Ability*. AILA World Congress 2014. Aug 10-15, 2014. The Brisbane Convention and Exhibition Centre.

2014. Otsuki, Atsuko/Carreira, Matsuzaki Junko. *English Conversation Practice Based on Thinking Ability*. Hawaii International Conference on Education. Jan. 5-8, 2014. Honolulu, Hawaii, USA.

【その他】

<https://researchmap.jp/OtsukiAtsuko>

6. 研究組織

(1) 研究代表者: 大月敦子(Otsuki, Atsuko) 相模女子大学・学芸学部・講師 研究者番号: 90618373

(2) 研究分担者: カレイラ松崎順子(Carreira, Matsuzaki Junko) 東京経済大学・現代法学部・准教授 研究者番号: 40454186